Awara News

あわらニュース vol.107

令和６年２月１日発行

「多くの人の笑顔のために」

- 重症心身障がい、難病、長寿医療を柱とし、地域に密着した専門医療を提供します。
- 社会的なアプローチを組み入れ、患者中心の心あたたまる医療を実施します。
- 臨床研究、教育研修、安全管理をとおして、常により質の高い医療を追求します。
- 公益性を確保し、効率的で自立した病院経営を推進します。

病棟新年の装飾

どうする?! 危機管理

副看護部長
福島 佳織

令和6年能登半島地震で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。ご心配おかけしましたが、当院では幸いにも患者さんも職員も建物も全て無事でした。

元旦から携帯電話の緊急速報に驚きテレビに釘付けとなりましたが、初めて聞くアナウンサーの緊迫感ある避難の呼びかけで、危機感を感じました。東日本大震災で無力感を感じたアナウンサーの方々が、「言葉で命を守る」ために冷静沈着さを捨てるようマニュアル化したと知りプロ意識の高さを感じました。翌日には悲惨な飛行機事故。旅客機の乗客乗員全員が無事に避難出来たことが唯一の救いでした。それは決して奇跡ではなく乗務員の訓練の賜物だと知り、やはりプロ意識の高さを感じました。私たち医療現場は患者さんの安全を守りながら医療を提供する使命があり、様々な落とし穴に落ちないようマニュアルや対策を策定していますが、周知徹底が難しいのも現状です。ミスは決して許される事ではありませんが、いざという時は素早く察知し、危機感をもって正しく対処出来るよう、日頃からプロ意識を高めて臨みたいです。

血液腫瘍・がん医療

血液腫瘍内科医長　大槻 希美

今回は前回に予告した終末期について述べます。血液疾患の終末期は合併症次第ですが、亡くなる2-3カ月くらい前までトイレへ動けることが多く、食事も1-2週間前まで食べられる、場合によっては亡くなるその日まで食べていたかたもいます。しかしながら、感染症の合併や、認知症の出現・進行、治療後の食事摂取能低下が出現することも多く、その場合、在宅療養生活の難易度が上がります。介護サービスを利用して、ご家族の協力を得て、ご自宅で最期を迎えるかたもいらっしゃいますし、ご自宅で快適に過ごせるぎりぎりまで自宅で、自宅では安楽に過ごせない状態になって（痰の吸引や酸素投与がきっかけとなることが多いです）入院で緩和ケアを行っていくかたもいらっしゃいます。どこでどのように過ごすことが、ご本人にとって望ましい形かの決定は、血液疾患に限らず、終末期に必須となります。あらかじめ元気な状態で話し合う、できれば定期的に行って方針の変更などを更新し、共有することが「当たり前」となっていくようでありたい、と考えています。

高齢患者の浮腫

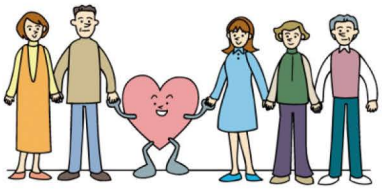
老年科長　桒田 敦

高齢患者で浮腫（むくみ）が認められることがあります。浮腫とは間質に水分が貯留している状態です。高齢患者の浮腫の主な原因としては以下のものがあります。心不全、腎不全（全身の水分量が増えている）、深部静脈血栓症（局所の水分量が増えている）、ネフローゼ症候群、肝硬変、低栄養（アルブミンが低下することで血管内の水分が間質に漏れ出る）、腫瘍による圧迫（リンパ管を閉塞させることで間質の水分が還流されなくなる）、甲状腺機能低下症（間質に特定の物質が沈着することで水分がたまる）。これらの原因が複数組み合わさっていることもよくあります。治療は全身の水分が増えている場合は利尿剤で水分を減らすということになりますが、それ以外では利尿剤を使うとかえってバランスを崩してしまうことがあるので注意が必要です。浮腫が認められる場合それを改善したくなりますが、病状によっては浮腫が残っている状態でコントロールしなければいけないこともあります。原因が特定できない難治性の浮腫が認められる場合は当院での精査を御検討下さい。

切れ目のない高齢者心不全治療を目指して

院長・循環器　見附 保彦

最近の心不全治療においては、エビデンスレベルの高い新規薬物治療および様々なデバイス治療が臨床現場に導入され、我が国をはじめ、欧米のガイドラインのアップデートも次々に進み、加えてビッグデータやAI診療など日常診療を取り巻く環境は確実に変化し始めています。特に高齢者心不全治療においては若年者以上に多様な側面からの専門的なアプローチが必要であると考えられ、それを担当する医療者には高度な専門性と同時に社会性倫理性を保ちながら全体を俯瞰して診療を行うことがより要求され、まさに多職種によるチーム医療が不可欠となってきました。患者さんの治療介入から在宅復帰に至る一連のプロセスを統合的にケアする観点が必須であると考え、当院では地域包括ケアに参加するすべての職種によるICFを用いた患者評価を行い，急性期から慢性期、入院から外来、さらに在宅へと継続性のある治療とケアを遂行し、より質の高い心不全診療を提供できるようスタッフが一丸となって取り組んでいます。



地域医療連携施設のご紹介

あわら病院と連携している医療機関等をご紹介します

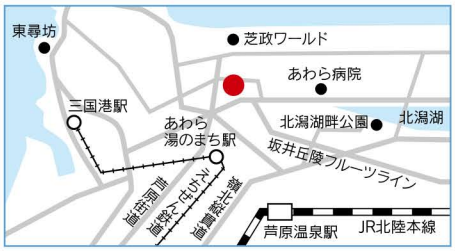
社会福祉法人　ハスの実の家

社会福祉法人　ハスの実の家
〒910-4103 あわら市二面87号26番地2
Tel 0776-78-6743　Fax 0776-78-6744

ハスの実の家は「障害のある仲間とともに 夢をカタチに」をスローガンにあわら市・坂井市に障害福祉サービス事業（グループホーム・ショートステイ・生活介護・就労継続支援B型・居宅介護・移動支援・福祉有償運送・相談支援）、介護保険サービス事業（訪問介護）をおこない、障害のある人たちの働く場・暮らす場・活動の場をつくりその地域生活を支えています。

いま、障害のある人の生活や事業所の運営は、収束を見ない新型コロナウイルスやかつてない物価高によって、ますます厳しくなっています。私たちは障害のある人の人権が守られ、安心した生活が送ることができるよう広く地域の皆様に行事などのイベントや署名活動で広報し共感と連帯をいただいております。

あわら病院は近年、高齢化してきた仲間が利用するグループホーム、日中活動事業所の最寄りの病院として日々の通院で利用させていただき、また緊急のケガや体調急変時にもお世話になっており、私たちの健康の維持と安心のためにはなくてはならない地域の病院です。これからも仲間・職員一同、よろしくお願いいたします。



地域連携室便り ～つながり、支え合いのある社会をめざして～

医療社会事業専門員　新谷 裕子

本格的な少子高齢化・人口減少社会に突入し、日本社会の環境は大きく変化しています。新型コロナウイルス感染症は、「5類」に変更されましたが、人と人との関係性やつながりが希薄化したことで、職場・地域・家族や親族内で問題を共有しつつ相互に支え合う機能の減少をもたらしている側面もあると考えられます。そして、医療機関においても、従来の制度や分野の枠の中に当てはまりにくい複雑化・複合化した課題があらためて浮き彫りとなる場面もみられることもあるように思われます。人々が地域社会とつながりをもちながら安心して生活を送るためには、どのようなかかわりが必要となるのかをあらためて考えていくことが求められているように感じます。

医療機関は、地域の重要な社会資源でもあり、医療ソーシャルワーカーは地域のアセスメントを行うことで、そこに暮らす人々の生活に結び付いた支援を行うことができます。地域医療連携室は、病院で唯一、部署内にさまざまな職種が在籍し、横のつながりでの関係性を作りやすい部門です。スタッフ一同が院内だけでなく院外でも横のつながりの活動を大切にしていくことで、地域の問題をも見据え、また、患者さんの自己決定と利益を循環させていく支援に繋げていきたいと思います。

外来担当医表

（令和6年2月1日現在）

診療科		月	火	水	木	金
総合	内科	見附 保彦	見附 保彦	大槻 希美	鈴木 友輔(第1・2・3・5) 見附 保彦(第4)	野村 量平(第1・3・5) 辻 俊比古(第2・4)
	小児科	川満 徹 ＊	川満 徹 ＊	川満 徹 ＊	湯浅 光織(第1・3・5)＊ 福岡 諒(第2・4) ＊	川満 徹 ＊
専門	リウマチ		津谷 寛		津谷 寛	
	血液・腫瘍			浦崎 芳正 ＊		大槻 希美(第2・4)
	生活習慣病			鈴木 友輔(第2・4)		伊藤 和広
	老年					桒田 敦(第1・3・5)
	神経			佐々木宏仁(第1・3・5)		
	循環器			見附 保彦	見附 保彦	
	外科	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢	齊藤 貢
	整形外科	伊與部 貴大				
	眼科				吉岡 達也 ＊	
	皮膚科		若原 真美 ＊			
	地域ケア	鈴木 友輔 ＊				
	禁煙外来	見附 保彦				

● 受付時間（午前診療）8:40～11:30　● 黄色枠は予約制　● ＊印は午後診察　● 休診日／土・日・祝日・年末年始

※皮膚科の診察は、火曜日の13:00～15:00（受付時間14:30まで）です。

※神経内科の診察は、第1・3・5水曜日（受付時間8:40～11:30）です。

※最新の医療体制についてはあわら病院ブログ「診療体制の最新情報」をご覧ください。

感染防止対策室便り

ICD　伊藤 和広

2023年ノーベル生理学・医学賞には、新型コロナウイルスに対する「メッセンジャーRNA＝mRNAワクチン」開発に貢献した、アメリカのペンシルベニア大学のカタリン・カリコ氏とドリュー・ワイスマン氏の2人が選ばれました。彼らは人工的に合成した遺伝物質のmRNAを医薬品として使うための基礎となる方法を開発し、2005年に発表しました。新型コロナウイルス感染症において、重要な役割を担ってきたmRNAワクチンですが、最近、初めて国産のmRNAワクチンが承認されました。これまでのワクチンと異なる点としてmRNAの長さが短いため、製造工程で品質を管理しやすいほか、変異ウイルスに対応してmRNAを作り直す作業が進めやすいといった利点があります。海外からの輸入に頼ることなく、必要量を供給できるようになることに期待が持たれます。他の医薬品でも同様ですが、必要なときに十分量が供給できる体制作りの強化が求められています。

冬の加温加湿器

主任臨床工学技士　藤嵜 孝次

人工呼吸器を使うときは鼻腔や気道の乾燥を防ぐため必ず人工鼻または加温加湿器を使用します。しかし、冬になると呼吸回路内に結露が生じ、その水滴によりせき込んだり不快感が増したりということがしばしばあります。この結露は使用する環境温度と人工呼吸器から供給される加温加湿されたガスの温度差により発生するので中々消えてくれません。病院はある程度室温を一定に保つのでまだ少量の水滴で済んでいますが、在宅で人工呼吸器を使用される患者さんには冬の結露対策として呼吸回路をタオルや布で包装して工夫していると聞きます。当院では回路内の結露軽減のため、熱線入りの呼吸回路を使用していますが完全とは言えません。どのように工夫すれば結露が少なくよく加温加湿された空気により快適に過ごしていただけるか、日々思案中です。

独立行政法人
国立病院機構 あわら病院
福井県あわら市北潟238-1
TEL.0776-79-1211（代表）FAX.0776-79-1249
〈地域医療連携室〉FAX.0776-79-1261
URL http://www.awara-hosp.jp/

交通のご案内

えちぜん鉄道「あわら湯のまち」駅より（約5km）　乗合タクシー［事前に登録が必要です］
JR北陸本線「芦原温泉」駅より（約10km）　乗合タクシー［事前に登録が必要です］

※乗合タクシーを利用するためには事前に登録が必要です。
乗合タクシー（デマンド交通）は、お電話一本で、停留所から目的地の近くの停留所まで直接行けるシステムです。

《お問い合わせ先》あわら市役所　生活環境課　生活グループ　0776-73-8017